

「大胆な妥協の路線」が、大胆な闘いの前進が

35万人体制、5510合理化、乗務員運用合理化への
全面屈服路線を導入する「本部」反動分子を許すな

全国の動労組合員のみなさん。第三六回全国大会方針案の職場討議資料が配布されました。「本部」反動分子はこの方針案を動労千葉の一部の職場へも投げ入れています。三五万人体制に対する反合方針や水本謀略へのより一層の埋没、そして、何よりも「千葉再建」の破産について何の総括もされていないこと等々大きく批判の対象となっています。「日刊動労千葉」は、今後何回かに渡って第三六回大会方針案の批判を展開したいと思っています。本号ではわれわれ、国鉄労働者「労働運動」として死活をかけた課題として存在する「国鉄三五万人体制」攻撃に対して、いかに闘うべきかを明らかにし「本部」反動分子のベテンの反合方針を批判していきます。

△企業防衛主義△の「本部」方針

政府・国鉄当局が強行せんとする「三五万人体制」攻撃の意図するところは、一言でいえば激動の八〇年代に見合う国鉄に再編するということに核心があります。その攻撃は、体制的危機の深刻化にあつて、いわば支配の側から現状の国鉄を「解体」するに等しい凄まじい攻撃であるといえます。その内実は、今後五年間に、七万四千人を合理化し、労働条件の劣悪化、職場慣行の破壊、昇給ストップ、年金支給すら凍結するなど、今日まで確立してきた諸権利、職場既得権を根底から破壊しようとする反動的攻撃であります。そして資本のための幹線輸送、ローカル線大中切りすて、民託化、職場の統廃合を強行し、とりわけ、「国鉄赤字」を叫びたて、国鉄に奉仕する労働者「労働組合」づくり、「国鉄再建」のために労資一体となれ等というイデオロギー攻撃をもって、戦後労働運動の戦闘的軸柱として日本労働運動の屋台骨を支えてきた国鉄労働運動の戦闘性を解体することを狙ったものであります。かかる恐るべき「三五万人体制」攻撃の狙いを「本部」反動分子は全国大会方針から意識的に欠落させています。それは何故か。結局「本部」反動分子の時代規定である「冬の時代」「謀略の時代」論による必然的産物として勝利の展望を見出すことができず、遂に自分だけがセクト的に生き残る道として当局に追従する企業防衛主義の道を選んだ結果にすぎません。一貫した当局の武装親衛隊としての路線として津山大会での「貨物安定宣言」があり、さらに純化したものとしての昨年の東京地本大会での「三五万人体制」攻撃の柱としてある乗務員運用合理化に対し「協定以外の要員を、とりわけ電車職場で数多くかち

とってきたいるが……これに手をつけなければならぬ」とまで方針化し、当局の合理化の尖兵たることを宣言したのであります。

意識的な「五五・一〇」軽視

方針書の基調は、意図的に「五五・一〇」の闘いの意義を低め、そこからの逃亡をきめこもうとしています。それは「五五・一〇」のたたかいは……第二段階のたたかいでありさらに長いたたかひの道程が続くということであります。」として「むしろひとつの節でしかない」と強調しています。そればかりか方針書の至る所に「状況に応じた大胆な妥協」こそが必要、と説いてまわり闘う前から屈服・承認を押しつけるという裏切り路線をより一層強めています。

前述した通り、国鉄労働運動の解体を策す「三五万人体制」攻撃、その初年度としての「五五・一〇」をしっかりとけとめ、これを先制的に打ち破るか否かが、勝利へむけて決定的な意味を持っているのです。そしてこの「五五・一〇」の最も基本的闘いとして動力車職場を直撃する「乗務員運用合理化」粉碎の闘いがあります。

全国の組合員のみなさん！

動労千葉は、すでに昨秋二波にわたる反合・三里塚・ジェットストを打ち抜き、反処分闘争の展開をもって「本部」反動分子の三月・六月の二度に渡る乗務員運用合理化妥結策動を粉碎してきました。われわれは、この闘いの成果をさらに固めて「五五・一〇」ダイ改阻止へ総決起します。共に決起しようではありませんか。

